

# 「大学で話すみんなの暮らし」の実施報告

— 行政・住民・会社・NPO・学校、みんなで話せば面白い！ —

鹿児島大学かごしまCOCセンター社会貢献・生涯学習部門 小栗 有子  
酒井 佑輔

## はじめに

鹿児島大学かごしまCOCセンターでは、社会貢献・生涯学習部門を中心に平成28年2月6日から8日の日程で「大学で話すみんなの暮らし」を開催した。この企画は、平成27年度文科省「学びによる地域力活性化プログラム普及・啓発事業」に採択された事業題名「産学官民による地域課題の協働的解決を促す学習交流プラットフォームの形成」として実施したものである。

開催期間の3日間を通して全国から271名が集まり、6つの事例研究、3つのスキルアップ研修、中高大生と社会人がともに学び合う「世代をつなぐ語り場リレー」を開催した。参加者の属性は、大学の教職員と学生はもとより、一般行政と教育行政、社会教育関係団体とNPO等の市民団体、社会的起業家と事業所、中学生と高校生など、様々な世代、立場、分野の方が鹿児島県を中心に九州各県より集まった。本報告では、この事業の目的と概要、その成果について報告する。

## 1. 事業の目的と特徴

### (1) 事業の目的とねらい

離島や過疎自治体を多数抱える鹿児島では、少子高齢化に伴う学校閉校の危機感や集落活動の維持困難、単身・共稼ぎ世帯の増加や価値観の多様化が集落の絆を低下させている。また、生産労働人口の減少は、商圏の縮小にも直結し、財政難の自治体からは、若者が地域に定着できる仕事づくりや、地域を革新する新たな産業づくりが、医療保険福祉の問題の対応とあわせて喫緊の課題となっている。

「大学で話すみんなの暮らし」は、大学が呼びかけ人となって、地域が抱えるこのような困難に日々悩みながら取り組む者が一堂に会し、日頃の活動や悩みを共有し、実践を前進させるために必要な知識やスキルを獲得することを目的に企画した。

地域が抱える困難は重層的で、どれ一つとっても限られた世代や立場、単独の分野だけでは解決は難しい。そのた

めに「協働的解決」が求められている。だが、協働は言葉で言うほど容易ではない。まず、これまで関係のなかった人や組織がつながったり、価値観や立場の違う人が協働するためには相互理解が必要である。お互いが本音を語り、傾聴し、事実を確認し合うなかで思い込みや先入観をもみほぐし、新しいものの見方や考え方を獲得していける過程づくり、つまりは、「学習交流」の場づくりを県下に広げていこうというのが企画の趣旨であった。

ところで、「協働的解決」の主体には、大学も含まれる。このことに関連して3点補足をしておきたい。一つ目は、協働のために必要な知識やスキルを身につけなければいけないのは大学人として同じであるということだ。地域の課題解決のために大学に期待することを地元自治体に尋ねたところ、最も多かったのが「住民一般向けの講義・講座」と「行政職員や専門職向けの講義・講座」であり、そのあとに「大学教員による具体的なアドバイス」と「学生との交流」が続く<sup>1</sup>。大学がこれらの期待に応え、地域とwin-winの関係でつながるためには、双方による学び合いが不可欠である。大学と地域が互いに過剰に期待し合い、場合によっては、一方にすべてを任せたり、押し付けたりするのでは、物事はうまく進まない。成果を出すためには、双方が各々の強みや弱みを理解し、何ができて何ができないのかを十分に共有した上で、役割と責任分担を明確にしていくことが重要である。

二つ目は、大学と地域の関係は単純ではないということである。前述のとおり、地域が抱える課題や困りごとは重層的で、関係する当事者（ステークホルダー）も多層的である。地域課題には、行政の「所管する分野（部署）を超える課題が多い」というアンケート結果があり、「所管する分野（部署）以外の情報を得る機会が少ない」ことや「行政と住民との情報共有（対話）が不十分である」ことが問題になっている<sup>2</sup>。だが、このような課題は行政側だけの問

<sup>1</sup> 当該事業の一環として実施した「地域課題の解決に向けた自治体ニーズのアンケート調査」に基づいている。詳細は、本誌に収録されている「地域課題の解決に向けた自治体ニーズのアンケート調査結果」を参照のこと。

<sup>2</sup> 同上参照のこと。

題ではなく、大学における学問・専門領域においても同じことがいえよう。ようするに、地域課題に応えるためには、ある一分野の専門や教員が関われば事足りるという状況は極めて少なくなっているということだ。アドバイスをする教員側の専門の幅の広さが求められており、チームで向き合うことが期待される。協働は、大学と地域との関係のみならず、大学の内部、すなわち、大学人の間でも求められているといえる。

三つ目は、個人が抱えている要求課題や必要課題をより公共的な地域課題に結びつけ、解決に向けた学習を組織でできる専門家集団の養成と活躍が求められるということだ。このような専門領域を担ってきたのが、社会教育・生涯学習の分野であるが、これまで積極的に大学のもてる力を生かすような取り組みがなされてきたとはいえない。大学も「協働的解決」の主体、つまり、地域の一員であることを考

なお、3日間にわたり開催した企画内容は、南九州を中心とする社会教育を専門にする研究者と行政関係者などがチームを組み、議論を重ねて準備をおこなった<sup>3</sup>。なによりも当日参加する方とともに深く学ぶことの楽しさや面白さを分かち合うことを期待した。

## (2) プログラム構成

最初の二日間は、事例研究とスキルアップ研修の組み合わせで開催した。事例研究は、3つのテーマにつき2つの事例を取りあげた【表1】。

スキルアップ研修については、2日とも同じテーマと講師で開催した【表2】。

事例研究とスキルアップ研修に関係する招聘者は、文科省事業「支援協力者委員会」委員6名を加えると計24名であった。遠方者では、長野県松本市や飯田市から事例報告

【表1】 事例研究のテーマと各事例

	7日	8日
テーマ1 地域課題解決の当事者育成	事例A 子ども・若者が地域の担い手になる過程づくり	事例D 大人が地域づくりの担い手になる過程
テーマ2 地域における住民関係の回復と自治	事例B 地域で孤立する「親・子どもの育ち」支援	事例E 住民自治を支える行政
テーマ3 地域資源の活用による地域課題の創造的解決	事例C 「地域課題」の解決を支える図書館	事例F 若者の参加・仕事おこし

【表2】 スキルアップ研修のテーマと講師

テーマ	講師
研修1 ファシリテーションの極意を学ぶ！	加留部貴行（NPO法人日本ファシリテーション協会フェロー/九州大学客員准教授）
研修2 人をつなげる「学び」の極意を学ぶ！	松岡広路（神戸大学教授）
研修3 「遊び」を通じた人集め・居場所づくりを学ぶ！	西川 正（特定非営利活動法人ハンズオン！埼玉理事）

えれば、大学に参加を促す専門家がいてもおかしくない。大学と地域をつなぐ知識と技術を持った専門性を有する者が間に介在することの意味は決して小さくないように思う。

以上の点を念頭に置きながら、「地域課題」と「学習」を結びつける新たな枠組みの提案とその必要性を問うために「大学で話すみんな暮らし」は企画された。

<sup>3</sup> この事業のために『「大学で話すみんなの暮らし」実行委員会』と「企画チーム」を発足させた。前者は、県下の一般行政と教育行政関係者を中心に組織し、鹿児島県から南九州へとネットワークを広げるために熊本県と宮崎県の各大学からも参加を得た。後者は、「かごしま生涯学習センター研究会」（平成26年発足）を母体にしたメンバーで、プログラムの企画と実施を中心に担った。『大学で話すみんなの暮らし報告書』（平成28年3月）に詳しい。下記にてダウンロード可能（<http://manabinetwork.sakura.ne.jp/>）。

者やコメンテーターとして参加いただき、充実したプログラムとなった。

3日目は、第1部と第2部に分けて実施し、前半は、2日間の成果の共有を社会人を中心に実施し、後半は、大人の話の中高大生につなぐために、中高大生からもそれぞれ「大人に学んでほしい」ことのメッセージをもらい、その意見に対して中高大生と社会人がワールド・カフェ方式で対話を行った。今回の企画の一つの特徴は、これからの地域を担う中高生などの若者が、大人と対等な関係で対話の輪に加わる場面をつくることであった。事前準備として鹿児島県立垂水高等学校と鹿児島大学教育学部附属中学校には、事前学習に赴き、薩摩川内市東郷中学校においては、花月敏郎校長を中心に事前学習を進めていただいた。いずれの学校においても学校長をはじめ教職員の理解と協力、並びに、生徒会を中心とする生徒たちの頑張りによって実現したことをここに記しておきたい。

## 2. 6つの事例研究<sup>4</sup>の成果報告

### (1) 事例研究Aの実施概要

#### ①目的

子ども・若者が地域に愛着をもち、安心して住み続けられる地域づくりのために必要な学習や活動のあり方を長野県の「飯田型公民館」の手法を事例にして探る。事例研究は、連合青年団を復活させた鹿児島県天城町や、人材育成の場として機能する熊本県球磨郡連合青年団協議会など若者の声を直接聴き、参加者同士で意見交換を行いながら進めていく。



#### ②当日の流れ

司会進行:小栗有子(鹿児島大学) 池水聖子(鹿児島大学)

<sup>4</sup> 詳細は『大学で話すみんなの暮らし報告書』(平成28年3月)を参照のこと。

- ・ オリエンテーション:趣旨説明 小栗有子(鹿児島大学)
- ・ 事例報告:長野県飯田市南信濃公民館  
「若者の地域づくりへの参加!」 林優一郎(飯田市南信濃公民館主事)
- ・ バズ・セッション(小グループで意見交換)
- ・ 鹿児島県天城町教育委員会と連合青年団からのコメント  
峰岡あかね(天城町教育委員会) 高田美希子(天城町連合青年団)
- ・ 熊本県青年団協議会からのコメント 中渡考之(熊本県球磨地区青年団協議会)
- ・ バズ・セッション(小グループで意見交換)  
論点を深め地域を次世代につなぐ世代間の対話の場の作り方をテーマに話し合う
- ・ まとめ→スキルアップ研修につなげる  
水畑順作(前・文科省社会教育課企画官(厚労省出向中))

### ③主な成果

参加者の間で下記の内容を共有することができた。

- ・ 地域活動には、きっかけが必要で、小中学生から地域について考える場を提供する。
- ・ 子どもたちに自分たちの意見を出させて、大人が耳を傾けるのはよいことだ。上の人は話し好きだがちゃんと聞く。
- ・ 有志の集まりと違いPTAは全員参加。賛同する人もいれば、反対する人もいる。したがって合意形成が難しく、ファシリテーションスキルが必要になってくる。
- ・ 言いづらいことも言えて、納得できるまで話をする場が必要で、聴き方と伝え方、褒め方と受け止め方などが大事になる。
- ・ 今は、青年団、中高生、その保護者がつながっている。今後は高齢者とつながっていきたい。若者と高齢者は共に活動しているが、話はできているようでできていない。一つの活動を基点にいろんな世代を取り込む。
- ・ 子どもと親の対話の場も大事である。大学生はかれらの専門性をうまく使う。
- ・ まず楽しいと思えることが必要である。子ども時代の公民館での体験活動や褒められることが、大人になって地域活動をやる原動力となる。
- ・ 行政だけがやるのではなく一緒にやりましょうが大事。子どもたちに地域にはこんな大人や職業があることに気づかせる。
- ・ 若者を押さえつける重鎮たちとも対話の場を設けて、

一緒に考えることが大事だ。

- ・自ら足を運んで声を聞く。強制せずに、ゆっくり、焦らず若手が気づけるようにする。
- ・人を探し集めるのは大変なので、友達を誘う、口コミが大事である。
- ・「公民館」にこだわる必要はない。

参加者は30名で、若者が多く、徳之島、長島、種子島などの鹿児島島の島や長野、佐賀、熊本、大阪など他県からも多様な立場の方が集まった。最後のあいさつでは、高田氏、中渡氏からは、いろいろな人の話が聞けて気づかされることが多く、持ち帰ってさらに勉強し、今後交流を続けたいとあった。林氏は、地域に立つとは、罵声を浴びせられることもあるけどそれでも耳を傾けること。自分をさらけ出し、泣くこともある。それだけ熱い気持ちでぶつからないと信頼関係は築けないし、意見も言ってくれない。飯田市だからできるのではなく、どこの地区でもできる。一人ひとりが学習したり思いをぶつけ合う場が必要で、本音を語りそれを束ねるといふ繰り返しが大事だと語った。水畑氏からは、今はすっかりした気持ちはないかもしれないけど、頭に蓄積されているはずだ。あせらず、既に持っているものを生かし、友達から友達へと少しずつ声をかけていくのがとよいと挨拶があった。 (文責:小栗有子)

## (2) 事例研究B 成果報告

### ①目的

さまざまな課題を抱え、支援が行き届かない孤立しがちな家庭(子/親)へアプローチする事例の検討を通じて課題解決の方向性を探る。「知り合おう!そして、みんなで元気になってかえろう!可能なら自分の悩みも打ち明けよう!」という分科会のあり方をめざす。

### ②当日の流れ

司会進行:農中 至(鹿児島大学) 前田晶子(鹿児島大学)



- ・オリエンテーション:趣旨説明 農中 至(鹿児島大学)
- ・事例報告1:長崎県南島原市の公民館GP「家庭・地域の絆再生支援事業」の事例  
「南島原市社会教育の成り立ち&活動事例の概要、地域の課題・展望」林田充敏(南島原市教育委員会生涯学習課長)
- ・事例報告2:福岡県飯塚市の筑豊子育てネットワーク「かてて!」の事例  
『かてて』のこれまでと課題の乗り越え、困難、可能性 渡邊 福(筑豊子育てネットワーク「かてて!」代表)
- ・事例報告3:鹿児島市のNPO法人・ミーサ・インフォメーションNetの事例  
「試みのはじまりと課題の乗り越え、困難、可能性」國弘小百合(NPO法人・ミーサ・インフォメーションNet代表)
- ・質疑応答+論点提起をめぐる意見交換  
ア) いま当事者はどのような質の課題を抱え悩むことがあるのか  
イ) その悩みと課題に対していかなるアプローチの筋道があり得、それらを通じた住民関係の編み直しはどのように達成されるのか
- ・まとめ→スキルアップ研修につなげる

### ③主な成果

3つの報告からみえてきたのは、異なるアクターによる現代日本の親・子ども支援のさまざまな形態であった。親・子ども支援の多様なあり方を学ぶことで、地域にあった手法や実現可能な取り組みについて考えるきっかけになったのではないと思われる。

異なるアクターによる3つの事例には明確な共通点があったと考えられる。「子育て期の親に可能な限り寄り添う」という点である。担い手、財源、方法、形態など多様ではあるものの、子育て世代を支える網の目を密にするという点では、いずれの取り組みも非常によく似ていることがわかった。行政、NPO、地域住民など担い手は異なるものの、地域のリアルにどう向き合うのかという、地域課題への積極的な応答の過程が共通してみられた。

事例研究Bの成果としては、以下の4点を考える。

- 成果1:各地における支援の重層性の把握。地域の現実と親のニーズに即した子育て支援実践が展開されている。
- 成果2:核家族化、地域の貧困化によって孤立しがちな子育て世帯は多い。公民館、NPO、住民組織(任意団体)な

ど子育てを協働化する取り組みは今後も社会から求められることになる。

成果3：子育て支援は未来の住民の支援である。そしてその支援過程は被支援者を地域のメンバーとして正当に位置付けていくことでもある。

成果4：地域事業・活動を媒介に子育て世代がつながり合うことで、住民関係は再編される。子育てにかかわる地域事業・活動の展開は未来に向けた地域自治そのものでもあり、分厚い支援と支援構造の重層化が求められる。

最後に、各報告者が語った印象的な言葉を、実践者から発せられた貴重な言葉として残しておきたい。

林田氏「支援は人、人を巻き込む」

國弘氏「この子の生活のことを考えていかないと」

「何か手を出すことができないか？」

渡邊氏「いきあたりばったり」

参加者からの質問も多くあり、悩みの語り場、困難の共有の場としての役割は十分に果たしたのではないかと考える。これからの一步が各地域で踏み出されていくのかどうかを見守り続ける必要がある。(文責：農中 至)

### (3) 事例研究C成果報告

#### ①目的

多様な図書館づくりの経験を共有し、「地域課題」に向き合うことのできる、図書館のこれからのあり方と専門性を探る。

#### ②当日の流れ

司会進行：岩下雅子(志学館大学) 岩橋恵子(志学館大学)

・オリエンテーション：趣旨説明 岩下雅子(志学館大学)

・事例報告1：佐賀県伊万里市民図書館

「市民とともに育つ図書館づくりを20年間続けることの苦勞と成果」古瀬義孝(伊万里市民図書館長)



・事例報告2：佐賀県武雄市図書館

「初めてCCC(カルチュラル・コンビニエンス・クラブ株式会社)と提携した図書館づくりの苦勞と成果」杉原豊秋(武雄市図書館長)

・意見交換

論点1：図書館が扱う「地域課題」とその学習支援のあり方

論点2：図書館づくりの公共経営(司書の専門性・集客力・評価など)

・コメンテーター：谷合俊一(文部科学省生涯学習政策局社会教育課 課長)、加留部貴行(日本ファシリテーション協会フェロー・九州大学大学院統合新領域学府客員准教授)

#### ③主な成果

議論では、伊万里市民図書館と武雄市図書館は一見相反するように語られるが、「図書館は市民、人づくり」というコンセプトが共通している点や、単なる本の貸し出しではなく、地域の課題解決や人と人をつなげる役目を果たしており、それ自体が地方創生の起爆剤となっているという意見も出された。また、両図書館の事例は、ライフスタイルやニーズの多様化にともない図書館の経営形態や施設デザイン等も多様化してきている現状を踏まえ、そうした図書館の多様性や可能性を示しているという意見も出た。他にも、新たな公共施設としての図書館は学習し成長する有機体として、発想力、企画力、実践力が必要となっているといった意見も出された。参加者からは、事例報告者と直接意見交換できるとは思ってもいなかった、と喜びの声もあがった。

全体の議論を踏まえたまとめとして、杉原氏からは、実際に知る、聞く、そして人と人とのつながりをつくることで真実が理解できる(伝わる)との意見が出された。古瀬氏からは、多様な年代や職種の人々がこうした対話の場を積み上げることで、次の展望が見え、新たな価値を創造できるということと、伊万里市民図書館もこうした対話の場を通じて、市民の意見を広くきき取り入れていきたい、という意見が出された。

約70名もの参加者が集まった事例研究Cは、参加者の熱気に満ち溢れた雰囲気の中かで閉会した。

(文責：酒井佑輔)

#### (4) 事例研究D 成果報告

##### ①目的

「通り名で道案内」や商店街再生プロジェクトをきっかけに、住民主役のまちづくりを実現する事例を通して、大人が地域づくりの担い手になっていくための学習や活動のあり方について探る。



##### ②当日の流れ

司会進行：相戸晴子（宮崎国際大学） 山城千秋（熊本大学）

- ・オリエンテーション：趣旨説明 相戸晴子（宮崎国際大学）
- ・事例報告1：宮崎県日南市油津地区  
「住民主体の地域づくり実践とそのファシリテート・コーディネート、成果と課題」谷越 衣久子（一般財団法人みやざき公園協会 南部事業室長/日南海岸地域シーニックバイウェイ推進協議会 事務局）
- ・コメンテーター1：五木村の経験に基づくコメント  
「住民自ら『あるもの探し』の学習を経て、課題を認識し、それに対して自分たちで解決しようとする取り組み」土肥 整二（五木村総務課）
- ・コメンテーター2：福岡市の経験に基づくコメント  
「それら住民主体の活動を支援する専門家集団としてのコメント」古賀 桃子（ふくおかNPOセンター） 文科省学びを通じた地方創生コンファレンス支援協力者
- ・論点提起と意見交換
  - ア) 地域課題を認識し、地域づくりに参加、参画する住民の学習実践
  - イ) 持続可能な住民主体の地域づくり運営のあり方
- ・まとめ→スキルアップ研修につなぐ

##### ③事例研究の主な結論

事例研究を受けて、参加者全員で日頃の実践で考えていること、悩み、課題などを出し合い、共有を図った。多くの論点が出されたが、成果として以下の4つに整理し、ま

とめとしたい。

成果1 一人ではできないことを人とつながることによって可能にする組織の存在

人とつながる動機は、①危機感、②楽しみがあるが、一人ではできないけれど、校区や公民館、町内会単位で多様な人が集まることによって、何かが生まれる（「通り名で道案内」、溪谷白滝の会、公民館じょいんとプロジェクトなど）。

成果2 地域を再発見する学習

地域の宝は、住んでいけば分かるものでもなく、「通り名」、「あるもの探し」、ワークショップという技法を用いて、学習することから始まる。

成果3 誰が地域づくりの担い手になるのか？

立場は違えど「住民と同じ空気を吸う」こと、第三者のものさしで計らないことである。また、住民自身が地域づくりを「楽しむ→稼ぐ」のいい循環をつくりだすことが、地域づくりを持続可能にする。しかし、資金・マネジメントの問題や、福岡市や五木村でみられた若者と女性を取り込むにはどうしたらいいのか、課題が残った。

成果4 地域づくりは「ハードルが高い、関わりたくない、やらなければならない」という考えを「遊び」に変える

ゆったりだけど確実に人と人がつながるしくみづくりと、いい加減に計画することが大事である。そのためには、ア) みんなで一緒にやれる隙間をつくること、イ) 参加者の多様性と寛容性を認める。つまり、やりたいことだけやっていいというおوراかさをもつこと、そしてウ) その地域に住んでいなくても、関心・興味をもつ「潜在住民」を増やすことである。

総じて〈楽しむ→学ぶ→伝える〉ことが、大人が地域づくりの担い手になるプロセスに欠かせない要素なのではないか。（文責：山城千秋）

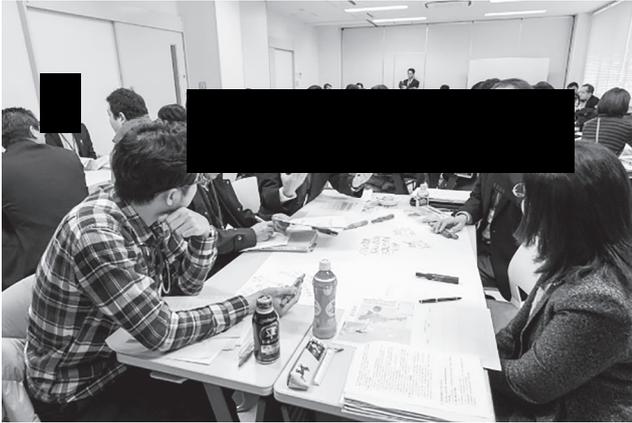
#### (5) 事例研究E 成果報告

##### ①目的

鹿児島市の地域コミュニティ協議会を事例に、新たな住民自治組織の活動を支える教育機能とコミュニティ機能の一体化を目指した行政内部の連携と学習のあり方について、長野県松本市の社会教育と地域づくりの経験に学びながら当事者間の相互理解を深める。

##### ②当日の流れ

司会進行：小栗有子（鹿児島大学） 岩橋恵子（志学館大学）



- ・オリエンテーション:趣旨説明 小栗有子(鹿児島大学)
- ・事例報告1:鹿児島市地域振興課の仕事  
「自治会支援と地域コミュニティ協議会の主管課の取り組みと苦労」益田 有宏 (鹿児島市市民局市民文化部地域振興課主幹)
- ・事例報告2:鹿児島市市民協働課の仕事  
「NPO・市民団体の活動を支援する主管課としての成果と苦労」戸床 美智子(鹿児島市市民局市民文化部市民協働課長)
- ・事例報告3:鹿児島市生涯学習課の仕事  
「地区公民館活動を支援する主管課としての取り組みと苦労」下吉 靖孝(鹿児島市教育委員会生涯学習課指導主事)
- ・バズ・セッション(小グループ意見交換)
- ・コメンテーター:「長野県松本市の社会教育と地域づくりの経験より」高橋伸光(長野県松本市中公民館長・生涯学習課長)
- ・論点をめぐる意見交換  
論点:住民自治組織の活動を支えるために協働で何ができるか
- ・まとめ→スキルアップ研修につなげる  
加留部貴行(日本ファシリテーション協会フェロー)  
藤田公仁子(富山大学)

### ③主な成果

事例報告の課題整理を行った後に「松本市から気付いたこと、知ったことは何か」、「鹿児島市との違いは何か」についてグループで話し合いを行った。その結果、鹿児島市への提案として参加者から以下のような提案がなされた。

- ・鹿児島市には、いろんな当事者が対話する場が欠けており、それができてくれば、当事者はもちろん、NPOや住民の方も参加できていくのではないかと。

- ・地域を知る、その中で人を知ることが大切である。3課だけではなく、ほかの行政、福祉分野も含めて意見交換が大事。横のつながりをもっと密にしないとけない。
- ・地区公民館が、校区公民館をまとめている形になっているが、校区公民館を学びという部分を支援している仕組みが地区公民館にはなくてはいけないのではないか。
- ・松本市のゆるやかな協議体はキーワードだ。課題の大きさや内容によって当事者が入れ替わり、いろんな人が発言する。決めていける仕組みだと思った。
- ・住民の視点で各課の行っている取り組みをもう一度束ねたり、見直したりするべきではないか。市民から見るとあちこちでいろんな学習がやられている

高橋氏からは、二つの市は、歴史や文化などはちがうがやっていることは同じで、情報交換することで見えなかった人や課題が見えてくると再度コメントをもらった。最後に藤田氏からは、継続的に学べる社会教育の大切さ、加留部氏からは、①過去:町の歴史を知ること、②現在:制度や仕組みのあるなしではなく、生きているか生けていないかで判断すべき、③未来:課題を予測し実践することが大事とコメントがあった。(文責:小栗有子)

## (6) 事例研究F 成果報告

### ①目的

鹿児島県薩摩川内市甕島(こしきじま)にある東シナ海の小さな島ブランド株式会社(山下商店)を事例に、地域資源を活用した仕事おこしを通じて、人と経済の好循環を生み出す仕組みづくりとその課題について探る。

### ②当日の流れ

司会進行:酒井佑輔(鹿児島大学) 農中 至(鹿児島大学)

- ・オリエンテーション:趣旨説明 酒井佑輔(鹿児島大学)
- ・事例報告:鹿児島県薩摩川内市 東シナ海の小さな島ブランド株式会社  
「離島でつくる人と経済の好循環～地域資源を活用した仕事おこしの苦労と未来～」西山佳孝(東シナ海の小さな島ブランド株式会社経営企画室長)
- ・コメンテーター1:飯田市の経験に基づくコメント 林優一郎(飯田市南信濃公民館主事)
- ・コメンテーター2:「地域の自治」や「協働」、「学習」をキーワードに、社会教育実践としての甕島の可能性



についてコメント 農中 至（鹿児島大学）

- ・ 事実確認+論点提起をめぐる意見交換
- ・ 論点：人と経済の好循環を生み出す仕組みづくりに向けた社会教育の可能性と課題
- ・ まとめ→スキルアップ研修につなげる

牧野 篤（東京大学）

### ③主な協議結果

参加者からは、へき地・離島で仕事がないと嘆くのではなく、また雇用され働くのでもなく、自らが仕事をおこすことの可能性や価値と、それとの公民館や社会教育の関係性について理解できたといった意見が出た。また山下商店のチラシのデザインやコミュニケーションツールとしての豆腐の事例を踏まえて、「伝えること」の重要性について意見が述べられた。他にも、山下商店の「おいしい風景をつくる」というコンセプトが新たな価値の創造へとつながり、それが経済や人の循環を生んでいることを理解していたという意見も出された。本企画の進め方として、甌島や他の島嶼に住む人びともスカイプ等を通して参加してもらうのも良かったのでは、という今後の事業実施に向けた改善点も提案された。（文責：酒井佑輔）

## 3. 3つのスキルアップ研修<sup>5</sup>の実施概要

### (1) スキルアップ研修 1

テーマ：ファシリテーションの極意を学ぶ！（対話の場づくりのコツ）

講師：加留部貴行（NPO法人日本ファシリテーション協会フェロー九州大学大学院 統合新領域学府 客員准教授）



### ①実施目的

時代の変化や価値の多様性と向き合う中で、世代や背景が異なる人たちが出会い、より多くの想いを引き出し合いながら、お互いのことを受け止め合う場づくりとして、「対話の場」の必要性が地域活動や市民活動の現場でも高まっている。ここでは、多様な人たちによる対話の場を実際に体感しながら、他地域の現場事例から学ぶことでそのコツを一緒に探っていく。

- 1) 対話の場づくりの心得（場づくりへの基本的な考え方／対話とは何か）
- 2) 対話の場づくりの実際（「ワールド・カフェ」体験とその実務・事例解説）

### ②実施内容（3時間の流れ）

1. 対話の場づくりの心得
  - ・ ファシリテーションとファシリテーター
  - ・ 対話と気づきで「出席者」を「参加者」にする
  - ・ 対話とは何か
2. 対話の場づくりの実際
  - ・ では、やってみましょう
  - ・ 「ワールド・カフェ」を通じて見えてくるもの
  - ・ 「共働」は「ストーリーづくり」
  - ・ チェックアウト

<sup>5</sup> 詳しくは『大学で話すみんなの暮らし報告書』（平成28年3月）参照のこと。

## (2) スキルアップ研修 2

テーマ：人をつなげる「学び」の極意を学ぶ！

講師：松岡 広路 (神戸大学教授)

### ①実施目的

つながりが失われていると言われて久しい時代、新しいつながりが必要ともいわれている時代、つながりの意味をどうとらえ、どのような学びを創っていったらいいのだろうか？以下のような流れで、楽しく、一緒に考えてみましょう。

★われわれは、いったい、どのような「つながりの世界」で生きているのでしょうか？

★あなたの場合、どのつながりが弱くなっていますか？

★「あなたの周りの人」を想定してください。何とのつながりが弱いでしょうか？

★つながりを再生させる、または、生むには、どのような「学び」を、どのように進めていくべきでしょうか？

★「一粒で、二度、三度、いやいや、四度も五度も美味しい学び」を、一緒に創りましょう！

### ②実施内容 (3時間の流れ)

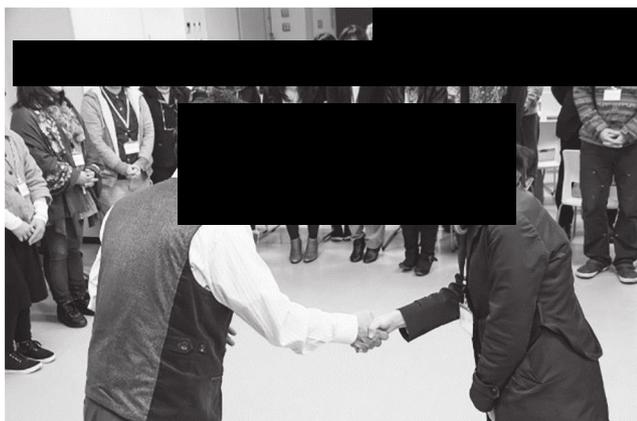
アクティビティ 1 私たちのつながりの世界を考える

アクティビティ 2 私たちのつなぎ直し

アクティビティ 3 つなぎ直し企画を創ろう

アクティビティ 4 発表・共有

アクティビティ 3 リフレクション



## (3) スキルアップ研修 3

テーマ：「遊び」を通じた人集め・居場所づくりを学ぶ！

講師：西川 正 (認定NPO法人ハンズオン埼玉 常務理事)

### ①実施目的

土日もイベントばかりで、手が回らない～」「やってもやってもきりが無い～」など様々な声を聞きます。この研修では、なぜ人を集めるのか？まちづくりにとってイベントとは何か？などの基本的な考え方から、具体的なノウハウまで、人がつながるのための企画や場づくりに必要な姿勢とスキルを参加者とともに考えます。キーワードは「遊ぶ」です。

### ②実施内容 (3時間の流れ)

・アイスブレイク

・七輪のかぶりもの

・子どものころの遊び絵の日記

・「あのイベントはよかったなあ、という経験談」ワーク

・講義「ハンズオン式企画術」



## 4. 世代をつなぐ「語り場リレー」

### (1) 第1部：2日間の成果の共有（社会人中心）

#### ①趣旨

社会人を中心に6日と7日に実施した6つの事例研究と3つのスキルアップ研修を通して学んだことを共有して、2日間の成果を確認する。中学生、高校生、大学生は後方に着席し、大人が学ぶ様子を観察する。

#### ②方法

3つのテーマごとに報告を行い、その直後に参加者同士で5分間のバズ・セッションを行う。その後、「あなたはこれからどのような学びをつづけていきたいですか」という問いをめぐって、参加者がワールド・カフェ方式で対話を行う。中高大生は、社会人が学ぶ様子を見学する。

### (2) 第2部：大人の話の中高大生につなぐ

（社会人×中学生・高校生・大学生）

#### ①趣旨

社会人を中心に共有した2日間の成果を踏まえて、大人の視点からだけでなく、中学生、高校生、大学生のそれぞれの視点から地域の暮らしや課題を捉え直す。そのことを通じて、社会人が、児童・生徒とともに学び続けていくことを確認しあう。

#### ②方法

最初に、中学生、高校生、大学生のそれぞれの立場から参加者に対して、「自分が大人になっても学び続けたいこと」「大人に学んでほしいこと」を主張・伝えてもらう。

中学生からのメッセージ： 薩摩川内市立東郷中学校・鹿兒島大学教育学部附属中学校

高校生からのメッセージ： 鹿兒島県立垂水高等学校

大学生からのメッセージ： 県下の大学生



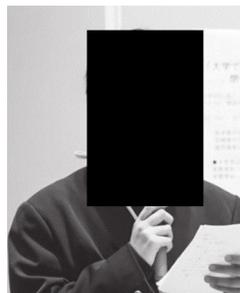
中学生、高校生、大学生からのメッセージを聞き、改めて「あなたはこれからどのような学びをつづけていきたいですか」という問いをめぐって対話する。

### (3) 第2部：中高大生のメッセージ

#### ①中学生からのメッセージ

##### ア) 薩摩川内市東郷中学校 2年1組

薩摩川内市東郷町はブドウやみかん、キンカン等四季折々の果物が沢山あるので、フルーツの里として有名です。また、藤川という地域には学問の神様として有名な藤原道真を祀った藤川天神があります。僕たちが通っている東郷中学校は、斧淵、藤川、南瀬、鳥丸、山田の各地域の小学校から集まってきた全校生徒186人の学校です。挨拶がよく、全校生徒全員が勉強、部活、学校行事に熱心に且つ楽しく励んでいます。



東郷の3つの小学校と東郷中学校では、授業の一環として、小学校5年生から中学校1年生は3つの地域の文化や歴史を学び、中学校2年生から3年生は、自分たちが地域で、日本で必要なことを考えています。

東郷では1つ大きな課題を抱えています。それは少子高齢化です。僕が住む藤川地域では若者が都会へ移り住み、高齢者の方が多くなり集落として成り立たなくなっているところが沢山あります。僕は大人の方々に無くなる危機に瀕している自分の故郷について学んでほしいと思います。僕たちは今回の取り組みで東郷がもっと活性化するにはどうしたらよいかを考えるヒントを見つけたいと思っています。よろしくお祈りします。



イ) 鹿児島大学教育学部附属中学校 2年2組

僕が大人になっても学び続けたいと思うことは心理学、相手の心を読み取る力です。これから人のつながりは必要になってきます。その時に、相手の気持ちになって考えてから行動するというのが大切になってくると思います。



相手の気持ちになって考えるということ得することも増えてくるのではないかと考えていて、例えば5枚の重なった紙があって、相手が隠した1枚の紙を見つけないといけないとします。そういう時に相手の心を深く考えてみると、当たりくじは普通隠したいと思いますよね。だから一番上におかないんじゃないか、という感じで予想できると考えています。以上の理由から心理学について学んでいきたいと思っています。

ウ) 鹿児島大学教育学部附属中学校 2年2組

私が大人の方に学んでいただきたいことは、大人に対する色々な想いをどんな子どもも持っていると思うんですけど、その想いを素直に大人に話せない現状があると思います。例えば、怒りや不満を持っていても言えずに一人で悩んでいる生徒や、逆に感謝の気持ちを伝えたくても恥ずかしくて反対に反抗してしまう子どももいます。そこで、大人の方には素直な気持ちを言える環境や雰囲気をつくってほしいと思っています。そうすることでコミュニケーションをはかることができ、もっとつながりが広まったり強まったりするのではないかと思います。



エ) 鹿児島大学教育学部附属中学校 1年4組

僕が自分で身に着けたい、学びたいと思っているのは自主性です。先ほど大人の方々の対話を見ていった時に、「横一列に並んで誰かが他の人が動き出すまで他の人たちは動かない」という意見があって、僕たちのクラスで問題になっているのは、発表者の一定化というものです。何人かしか発表せずほとんどの人が話をきくという立場にまわっている。それで自主性が増すことに



よっていろいろな人の意見を聞くことができ、それが町の発展にもつながっていくのではないかと思います。

オ) 鹿児島大学教育学部附属中学校 2年3組

私が大人の皆さんに学んでほしい、お願いしたいことは2つあります。1つ目はもう少し私たちを見守ってほしいということです。私たちは例えば、頭のなかで色々考えて今からやろうと思っていることに対して「何かやりなさい」と言われると「今からやろうと思ってたのに!」となります。私たちのことを心配してくれているのは凄くありがたいのですが、もう少し見守っていただければと思います。



2つ目は少しきつい言い方になってしまうかも知れないですけど、大人の都合や意見で物事を進めるときに、「子どものためにやっているんだよ」というあやふや理由で語るのはやめてほしいなと思います。最後に、私たち教育学部附属中学校はこの会を踏まえて視野を広げ、自分自身や学校を高める良いきっかけにしたいと思っています。よろしくお願いします。

②高校生からのメッセージ

ア) 鹿児島県立垂水高等学校 2年1組

まず最初に垂水高校がある垂水市を紹介したいと思います。

垂水市はここ鹿児島市から鴨池フェリーで渡ることもできます。人口は1万6千人でとても縦に長いかたちをしており、37kmの海岸線を有しています。そういう地形を生かして、私たちの垂水市ではブリヤカンパチ、絹さやえんどう、インゲン等の栽培を盛んにおこなっています。



垂水高校は垂水市の唯一の高校です。創立90周年を迎えた垂水高校は生徒数は122名。男女比は約4対6で女子の方が多いです。普通科3クラス、生活デザイン科3クラスです。出身地別では垂水市が約5割、鹿屋市が約3割、鹿児島市の方が約2割です。鹿児島市の方はフェリーで、鹿屋市はバスで通っています。学校の雰囲気は生徒が少ないので仲良く、先輩後輩も縦もしっかりしていますが、和気あいあいとした雰囲気です。行事では1年生のときに沢登りがあり凄く寒かったですけど川を上っていく楽しい行事

があったり、史跡めぐりといって垂水市にある史跡を巡って16～20kmみんなで歩いたりします。垂水高校としては地元の行事「垂水フェスタ」という夏祭りやカンパチフェスタに参加しています。

垂水高校では通学費の3分の2ほど垂水市から支援を受けていたり、検定の受験費を最初の分だけ全額補助が受けられたり、最近では、東進ハイスクールの社長が垂水出身ということもあり、東進ハイスクール衛星講座受講費に補助がです。

私が大人に学んでほしいことは大人の方が子どもに対して言った言葉を自分でも死守してほしいです。例えば、大人の方は「自分から挨拶しなさい」と言いますが、町とか学校を歩いていて、大人の人から挨拶されたことはほとんどありません。大人の方も多分子どもの時に「自分から挨拶しなさい」と言われていると思うのに、大人になったら自分から挨拶しなくて良いのかなあと思ったりします。

#### イ) 鹿児島県立垂水高等学校 1年1組

私が大人の方々に学んでほしいことは、大人の考え方と私たち高校生の考え方は少し違うなと思うことも多く、私たちも大人の考え方が難しいと感じてしまうことがあるのですが、大人の方々にも子供の気持ちを理解しようとしてもらえればと思います。大人も子どもの気持ちをしっかり考え、子どもも大人の気持ちをしっかり考えるということがこの場ではできると思うので、そこから少しでも地域の活性化につながっていったら良いなと思います。



### ③大学生からのメッセージ

#### ア) 鹿児島国際大学 4年

後1か月半で大学を卒業し社会人になります。生まれも育ちも鹿児島で、一昨日内定した企業から辞令が出て4月から県外へ出ることになりました。僕が皆さんに学んでほしいと感じていることは、小中高等学校の同級生が関東や県外へ出ていってしまっ、帰ってくる素地が整っているのかなと思っていて、昨日、一昨日と色々な事例を学ぶ中で考えました。これから、関東の大学で学んでいる人や働いている人が鹿児島へ戻ってくるため



に、鹿児島のみんなで僕たちにできることは何か、考えてほしいと思います。

#### イ) 志学館大学 4年

私も4月から社会人になります。私は、指宿市のものすごく人口の少ない地域に住んでいたのも、小・中・高校と地域の人と挨拶をしても勿論挨拶が返ってきますし、一言挨拶するだけじゃなく、「最近どう？」と自分の状況を話す環境のなかで育ちました。いまは大学の関係で鹿児島市内にきているわけですが、垂水高校の方が言っていたように、挨拶とかそういった面は地域によって違うんだなと思いました。そこで、大人と子どもや学生だったりが気軽に会話をできる、一言、二言話ができる環境は大事だなと思いました。挨拶をきっかけにして私たちは「こういう大人の人がいるんだ」と気づき勉強になると思います。私が大人に学んでほしいのは一般的に言われていることを言うのではなく、「私はこうだった」、「私はこうしてきた」という経験談を話して欲しいということです。それ自体が私たちにとって学びになると思います。私も実際大学に入りこういった対話の場に参加するようになって、「考える大人がいるんだ」と勉強になったので、自分の体験を大きく言うのではなく、同じ目線にたって話し説明してくれると良いと思いました。



#### ウ) 鹿児島大学大学院 修士課程 2年

私は普段研究室にこもりパソコンと向き合ったり、本とへたするとおしゃべりするような生活をしていますが、鹿児島に来て2年がたって地域のボランティア団体の活動に積極的に参加したり、こうした対話の場だったり、大学院で学んでいる英語教育を活かした大人の学びなおし、英語が苦手な方でも参加できる英語のトレーニングの場を展開しています。私はもうすぐ社会人になるのですが気がなっていることがあります。私はいま学生だから自由に様々な活動に参加できると思うのですが、大人になったら社会のルールや会社のルールに縛られることになると思います。私はそうしたルールに縛られるのがあまり得意な性格ではないのでこうした活動に社会人に



なって参加できるのか気になっているところです。

そうした中で大人に学んでほしいのは、学生との「きっかけ」というのが色んなテーブルで議論されたと思います。ただ、私たちはこういう世代なので、スマートフォンのラインやフェイスブックを用いて連絡をとっています。「情報を発信しているわ!」と言っても、紙媒体に目を通すことはありません。もしかしたら見ずに捨てるかもしれません。ですので、私たちの世代にあったコミュニケーションのとり方を大人の人には学んでほしいと思います。私たちにはエネルギーがあるので、私たちが何かしたいなあと思った際に、大人だからこそ、そうした機会をつくってほしいと思います。

工) 鹿児島大学4年

大学では、大学外の活動、例えば社会人の方々の飲み会に参加したり、「鹿児島リーダー学生会議」を主催したり、就活系の学生団体を設立し、地方で就職活動のイベントがなかなかないので、「私たち学生が人を集めるのでイベントを実施してくれないか」と企業に依頼するかたちで就職活動イベントを実施してもらう活動などをおこなっていました。



私は4月から東京で就職しますが、今後とも地方にイベントを持っていけるような仕事ができればと思っています

す。皆さんに是非学んでほしいと思うのは、フェイスブックの活用です。積極的に動いている学生はフェイスブックをしているので是非活用してほしいと思います。社会人からみれば大学生は学生、中学・高校生からみたら先輩でちょうど世代のあいだに入れる立場にいると思います。ですので、そんな大学生を有効活用していただき、飲み会に誘っていただき色んなことを熱く語ってもらえたら大学生にとっても良い刺激になると思います。

(4) 「学びへの想い」を漢字一文字

世代をつなぐ「語り場リレー」を締めくくりにあたって、第1部と第2部の進行を務めていただいた加留部氏より、最後の問い「学びを通じた地方創生へのあなたの思いや覚悟を漢字一文字で書き表す」(ことをもって3日間のプログラムを終了した。

中学生・高校生・大学生

伝、愛、解、聴、繋、動、創、対、思、想、学、変、笑、仲、知、尊、結、話、深、楽、頑、協、共、続、自、心、輪、希、皆、助、都、郷、歴

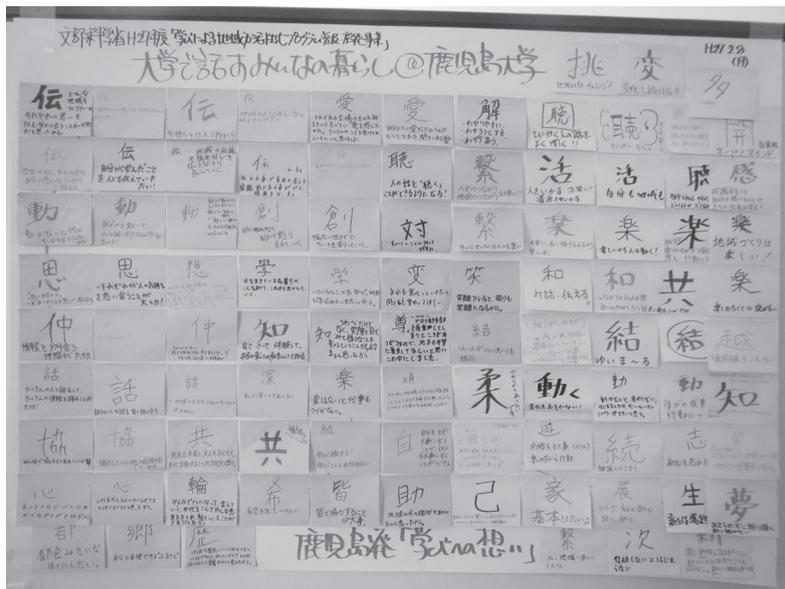
社会人

挑、変、多、聴、開、活、感、楽、和、共、結、越、柔、動、知、遊、続、志、愛、己、家、展、生、夢、繋、次、新

平成28年2月8日 鹿児島発「学びへの想い」

「学びを通じた地方創生へのあなたの思いや覚悟を漢字一文字で書き表してください」

その文字を選んだ「そのココロ」も



## おわりに

「鹿児島大学は地域づくりや地域貢献と言っているけれど、何をしているのか、何をやりたいのかさっぱりわからないわ」、「鹿大って物理的には近いけど心理的距離は遠いんですよ。敷居が高い感じがします」、「地域に開かれた大学と豪語するわりには閉ざされているよね」、「鹿児島大学広報は『広報』になっていないよね。情報発信している気になっているかもしれないけど、それが結局相手に届いていなければ『広報』になっていなんだよ」。

これらは、筆者が鹿児島大学に着任して以来、地域の方々から頂いた言葉である。ここに書けないぐらい辛辣な意見を頂戴したこともある。実際のところこれらの意見は鹿児島に住む170万人の大半の本音を言い表していると個人的には考えている。つまり、鹿児島大学は鹿児島の地域に開かれていない。したがって、鹿児島大学は鹿児島に住む多くの人にとってよく分からない、関係のない存在なのである。

「大学で話すみんなの暮らし」の事業目的と狙いは前述した通りである。ただし、こうした鹿児島大学の状況を少しでも改善し、鹿児島大学が地域の人たちに身近な存在となり、関心を持ってもらうにはどうしたら良いか。これが本事業に取り組む筆者の課題認識でもあった。そこで特に力を入れたのは広報である。鹿児島では地域の課題解決のためのアイデアとアクションが生起する場づくりを目的とした「鹿児島未来170人会議」等を筆頭に、地域づくりに関わるイベントの多くがSNS（特にFacebook）を広報手段として用いている。それは、SNSだとホームページやブログ等よりも情報が拡散されやすいというメリット以外に、SNSで想いを共有した人と人とつながりやすく、新たな取り組みへの展開が期待されるということもある。そこで筆者もまたFacebookでイベントページを立ち上げ、定期的に事業実施の意義や可能性、参加者の魅力など積極的に情報発信を行い、鹿児島大学をより身近に感じてもらえるよう働きかけた。

こうした広報活動の結果、筆者自身もFacebookを通じた参加者とのつながりを基礎に、鹿児島大学を会場とした公開講座実施等の新たな取り組みが展開した。また、Facebookのイベントページを見て「当日参加できなかったのでは非同様の機会をつくってほしい」という声もあがり、有志が集まって本事業の部分的な企画を志学館大学でも実際に行うことができた。参加者同士もFacebookを通じてつ

ながり、参加者同士によるイベントの企画立案等の新たな動きも見られている。

今後もこうした情報の可視化と共有を意識しつつ、本事業で意図したような取り組みを継続して行っていきたい。そして、鹿児島の地域に住む人びとにとって鹿児島大学が真に開かれた身近な大学となり、鹿児島大学生涯学習憲章がうたうところの「地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していく」文化を育んでいきたい。